

J. ウェスレーの小グループ運動における メソジストの霊性について¹

趙 永 哲

はじめに

小グループ運動は最近の新しい概念ではない。それは、歴史の初めから、人は共同体として生活し、家族や集団などといった小グループは常に存在してきた経緯があるからである。また、聖書の中にも小さなグループの例は数多く見られ、教会史の中においても小グループ運動は盛んであった時期がある。

しかし、キリスト教史において、ジョン・ウェスレーほど小グループ運動による宣教、教会組織、霊性神学に影響を与えた人はいないであろう。通常、ウェスレーあるいはメソジストの霊性について論じる場合、次の三つの観点から論じられている²。第1に、ウェスレー自身がイギリス国教会（以下、国教会）

の司祭であったことから国教会のハイ・チャーチ（High Church）中心のリタージ（Liturgy）・聖礼典（sacrament）中心の教會的な霊性である³。第2に、「救いの確証」を重んじ聖霊の働きや救いの確信などを強調するリバイバル的な霊性である⁴。第3に、ウェスレー霊性に見られる独自の「体系的な小グループ」の霊性である。

この論文は、主に小グループにおけるメソジストの霊性について考察していくことにしたい。これまでウェスレーに関する研究は、主に理論的で歴史・組織神学的なアプローチが多い傾向にあるが、本論文は現在、牧会に携わっている者として実践神学的なアプローチを試みることにする。

ウェスレー自身は小グループ運動の創始者ではない。しかし、メソジスト小グループ研究者であるフンシッカーがウェスレーを今日で言うところの「小グループの父」として評価しているほど⁵、ウェスレーの小グループ運動はキリスト教史の霊的な面である役割を果たして来たということが出来る。

ウェスレーは小グループ運動あるいはソサエティー運動の中で生まれた⁶。さらに、大学生活や牧会の場として教会区だけでなく、ジョージア宣教地での働き、さらに福音的な回心を越えて、常にソサエティーあるいは小グループ運動

Books, 2000 などがある。

³イギリス国教会に関する教會的な霊性については、William J. Wolf, ed., *Anglican Spirituality*, Morehouse-Barlow Co, 1982. (WJ.ウルフ編・西原廉太訳『聖公会の中心』聖公会出版、1995年)、そして H.R.McADOO, *Anglican Heritage: Theology and Spirituality*, Canterbury Press, 1997., John N. Wall, *Anglican Spirituality*, in Robin Maas and Gabriel O'Donnell eds., *Spiritual Traditions for the Contemporary Church*, Abingdon Press/ Nashville, 1990, pp.269-286などを参照。

⁴ウェスレーの確証の教理や聖霊の証しに関しては、中村謙一、「ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察」『ウェスレー・メソジスト研究』vol.7、教文館、2006年、97-121頁を参照。

⁵Hunsicker, David., *John Wesley: Father of Today's Small Group Concept?*, *Wesleyan Theological Journal*, v.31, no.1, Spring, 1996, pp.192-211.

⁶ウェスレーの父サムエル・ウェスレーは、当時 Anthony Horneck(1641-1697)を中心に国教会の中にあつた小グループ運動 (religious society movement) に影響され、ウェスレーが生まれる2年前である1701年に自分の教区に Epworth Society を組織した。

¹ 本論文は、日本ウェスレー・メソジスト学会（2007年9月11日、関西学院大学）において、発表され、学会誌の掲載のため、多少の加筆訂正が加えられている。

² ウェスレーのメソジスト霊性についての基本的な文献は、John Wesley, *A Plain Account of Christian Perfection*, London: Epworth press, 1952 (1987printing) (以下、Plain Account), Gordon S. Wakefield, *Methodist Spirituality*, Epworth Press, 1999, Robin Maas, *Wesleyan Spirituality*, in Robin Maas and Gabriel O'Donnell eds., *Spiritual Traditions for the Contemporary Church*, Abingdon Press/Nashville, 1990, pp.303-319., Frank Whaling, ed., *The Classics of Western Spirituality*, John and Charles Wesley: Selected Writings and Hymns, New York: Paulist, 1981., David Lowes Watson, *Methodist Spirituality*, Kenneth J. Collins ed., *Exploring Christian Spirituality*, Baker

と深く関わっていた⁷。実際に、メソジスト運動は国教会の中にある小グループ運動（すなわち、国教会内の小さなグループ、*ecclesiolae in ecclesia*）として始まっており、その目的は個人の霊性⁸訓練のみならず、社会的霊性⁹を实践することであった。さらには新しい分派（*sect*）を作ることが目的ではなく、イギリスを改革すること¹⁰、その中でも特に国教会の中を改革するためであり、聖書的な聖（*scriptural holiness*）を広めることにあったのである¹¹。

このようなこれまでの研究成果を受けて、この論文では小グループ運動におけるメソジストの霊性を考察することにおいて、まずウェスレーの小グループ運動の背景について述べた後、様々な試行錯誤を通してウェスレーが実験した小グループはどのようなものがあり、どのように実験されたのかについて考察することにする。その後、ウェスレー自身が創り出した「小グループ」の目的やその役割について論究を進めていく。最後に、小グループ運動を通してウェスレーが体験したものは何であったのかを中心に、そのメソジスト霊性を実践神学的な立場から明らかにすることがこの論文が目ざす焦点である。

I. 小グループ運動の背景

⁷ その中で一つの例を挙げれば、ウェスレーが1735年ジョージアへ行ったのは、海外福音伝道会（*The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG*）から宣教師として派遣されたのである。Hunsicker, David., *John Wesley: Father of Today's Small Group Concept?* 196 頁の註を参照。

⁸ 霊性に関しては数多くの資料があるが、ウェスレー研究者 Kenneth J. Collins, *What is Spirituality? Historical and Methodological Considerations*, *Wesleyan Theological Journal*, v.31, no.1, Spring, 1996, pp.76-94 を参照。

⁹ 拙稿「J.ウェスレーの社会的霊性に関する一考察」、『神学研究』（52号）、関西学院大学神学研究会、2005年、195-205 頁を参照。

¹⁰ *To reform the nation, cf. Leon O.Hynson, To Reform The Nation : Theological Foundations of Wesley's Ethics*, Grand Rapids, MI : Francis Asbury Press, 1984.

¹¹ Wesley, John(by), *The Works of John Wesley* (以下 *Works*), ed. Thomas Jackson, Baker Book House Company, vol.8, 1979, p. 299.

ウェスレーの小グループ運動の背景として、エキュメニカルな背景¹²があった。実際、ウェスレー自身小グループ運動を始める以前にも、既に様々な形の小グループ運動が存在していた。例えば、ローマ・カトリック教会には「イエズス会（*societas Jusu*）」と、ドイツ敬虔主義創始者のシュペーナー（*Philipp Jakob Spener, 1635-1705*）によるエクレスオラエ・イン・エクレスシア（*ecclesiolae in ecclesia*）¹³、モラビア派の班会（*band*）、国教会の宗教ソサエティー（*The Religious Society*）、そして形式にとられないフランスのデ・レンティ（*De Renty*）の小グループ運動¹⁴なども存在した。これまでの研究では、ウェスレーによる小グループ運動の具体的なモデルは主に彼自身が属していた国教会の宗教ソサエティーとモラビア派の影響が強調されていた¹⁵。

しかし、モンクはピューリタン¹⁶や非国教徒の同志的教会からもウェスレーは多くのものを得ていたと主張している¹⁷。本論ではこのような論証をウェスレーの小グループ運動に多くの影響を及ぼした国教会の「宗教ソサエティー」、シュペーナーの影響によるモラビア派の「エクレスオラエ・イン・エクレスシアとしての班会」、ピューリタンの「集められる教会」などを中心に論究していくことにする。

¹² これに関しては、拙稿「J.ウェスレーにおける宣教理解の一考察」、関西学院大学大学院神学研究科修士学位論文、2002年、第1章の3節「エキュメニカルな背景」と Theodore Runyon, *The New Creation : John Wesley's theology today*, Nashville : New York : Abingdon Press, 1998, pp.207-215 (Wesley's Ecumenism) を参照。

¹³ これは教会内の小さな教会（*little churches within the church*）の意味として、*Collegia pietatis* と呼ぶ。

¹⁴ Henderson D. Michael, *John Wesley's Class Meeting : A Model for Making Disciples*, Francis Asbury Press, 1997, pp.47-51.

¹⁵ Howard A. Snyder, *The Radical Wesley & Pattern for Church Renew*, Illinois: Inter-Varsity Press, 1980, pp.45-49.

¹⁶ ウェスレーとピューリタンとの関係についての日本語研究は、馬淵彰「ウェスレーとピューリタン」『ウェスレー・メソジスト研究』4（教文館、2003）61-81 頁を参照。

¹⁷ Robert C. Monk, *John Wesley his puritan Heritage*. Lanham, Maryland, and London: The Scarecrow Press, 1999, p.181ff.

1. 国教会の宗教ソサエティ（**The Religious Society**）：ウェスレー小グループ運動の起源¹⁸

宗教改革以降「小グループ」という概念が教会生活において浮上したのは17世紀後半のことである。この小グループ運動はイギリスでは主にA.ホーネック（**Anthony Horneck**）を中心に、ドイツではシュペーナーを中心に発展した¹⁹。

ホーネックは会衆の霊的訓練のために小グループ（**societies**）を作り出している。彼がウェスレーに与えた最も大きな影響は宗教ソサエティを通して貧しい者や寡婦・孤児を世話する社会への実践的な活動においてであった²⁰。このような宗教ソサエティは後にウェスレーによる小グループ運動を生み出すことになる。その中には1698年トマス・ブレイ（**Thomas Bray**）によって作られた「キリスト教知識普及協会（**the Society for Promoting Christian Knowledge, SPCK**）」と、1701年同じくブレイによって作られた「海外福音伝道会（**The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG**）」がある²¹。特にウェスレーの父サムエルはSPCKの強力な後援者で、1702年自分の教区エプワスでこの宗教ソサエティを始めている。ウェスレー自身も1732年オックスフォードにいる間、SPCKの会員になっており、このような宗教ソサエティと小グループ運動の関わりがホーリークラブの発展に結びついたことは否定できない²²。

2. モラビア派のエクレスィオラエ・イン・エクレスィアとしての班会

メソジスト歴史家のデイヴィス（**Rupert E. Davies**）は、キリスト教史における小グループ（**society**）運動の例としてルター派の一派を組むモラビア派の**Unitas Fratrum**²³と、国教会のメソジスト連合会（**Methodist United Societies**）を挙げている²⁴。

シュペーナー（**Philipp Jakob Spener, 1635-1705**）とフランケ（**August Hermann Franke, 1663-1727**）、ツィンツェンドルフ（**Ludwig von Zinzendorf, 1700-1760**）などが中心となったドイツ敬虔主義²⁵は、ウェスレーに大きな影響を与えている。特に、シュペーナーのエクレスィオラエ・イン・エクレスィア、即ち**Collegia pietatis**²⁶運動はその後、モラビア派の指導者ツィンツェンドルフに受け継がれた経緯からウェスレーの小グループ運動に大きな影響を与えている。

ウェスレーはモラビア派に出会って以来²⁷、モラビア派の神学的教訓と実践的な教訓を取り入れている。ウェスレーがモラビア派から受けた実際の教訓として、モラビア派の組織、敬虔生活、そして宣教への熱情や献身などを挙げることができる。特に、ウェスレーとモラビア派の関係を研究したトールソンはその著者『モラビアンとメソジスト』²⁸の中で、モラビア派がメソジストに貢献したことを主張していて²⁹、その例として挙げられているのが、エクレスィオラエ・イン・エクレスィアとしての班（**Band**）組織である³⁰。エクレスィオラエ・

²³ **The Church of the Brethren**

²⁴ **Rupert E. Davies eds. The Works of John Wesley(BE), vol. 9, p.3.**

²⁵ これに関しては、**Louis Bouyer, Orthodox Spirituality and Protestant and Anglican Spirituality, The Seabury Press, 1969, p.169-184** と **Henderson D. Michael, John Wesley's Class Meeting7, p.51** 以下、そして **Richard P. Heitzenrater, Wesley and the People Called Methodists, p.19** 以下を参照。

²⁶ **Ecclesiolae in ecclesia** もしくは、**little churches within the church.**

²⁷ ウェスレーとこのモラビア派との初めての出会いは1735年10月21日にアメリカ大陸に向けて出航したシモンズ（**Simmonds**）号の船上であった。

²⁸ **Clifford W. Towson, Moravian and Methodist : Relationship and Influence in the Eighteenth Century, London : Epworth Press, 1957.**

²⁹ **Ibid., pp.174-247.** この中には一般的な影響と特別な影響が詳しく説明されている。

³⁰ これはドイツ語で**die Banden**である。1736年以後、これは**Kleine Gesellschaften**

¹⁸ **Hunsicker, David., op.cit., pp.193-197(Origin of the Small Group Movement).** また、ソサエティの起源については、**Simon, J. Smith, John Wesley and the Methodist Societies(2nd, London,1955)**や**Richard P. Heitzenrater, Wesley and the People Called Methodists, Nashville : Abingdon Press, 1995, p.17-25**を参照。

¹⁹ **Hunsicker, David., op.cit., p.194.**

²⁰ **Ibid., pp.195-196.**

²¹ **Rupert E. Davies eds. The Works of John Wesley(Bicentennial Edition, 以下BE), vol. 9, Nashville : Abingdon, 1989, p.4.** このSPCKやSPCを小グループと言え難い面があるが、それらの宗教ソサエティはウェスレーの小グループ運動に影響を与えたのは確かである。このようなソサエティに関しては、**Gordon Rupp, Religion in England 1688-1791, Oxford: Clarendon Press, 1986, pp.290-391**を参照。

²² **Hunsicker, David., op.cit., p.196**の註11を参照。

イン・エクレスシアとしての班会はウェスレーの様々な組織の中で最も直接的なモラビア派の影響があらわれているものである³¹。

一方、初期メソジストの小グループ「組会」の起源とその意味について研究を続けているワットソン³²は、ウェスレーがモラビア組織から学んだものは「班会」であり、恵みによる賜物としての班会は霊的な養育あるいは成長を導くものであると主張している³³。ウェスレーはオックスフォードの時代から小グループにおける交わり (**Fellowship**) や霊的な養育の価値を認識していたが、モラビア派の班組織を通して霊的な共同体³⁴(**community of spiritual**)としての小グループを生み出して行ったのである。

3. ピューリタンの「集められる教会」 (**The gathered church**)

ここでは 17 世紀に盛んであったピューリタンを通して 18 世紀ウェスレーの小グループ運動がどのようなものを学び取ったのかを考察してみることしたい。ウェスレーとピューリタンの関係について、これまで多くの研究が成されたが³⁵、ここではこのテーマで最も定評あるロバート・C・モンクの著書『ジョン・ウェスレー、そのピューリタンの遺産』³⁶を中心に考察してみることにする。

(**little societies**)として知られるようになった。Cf. David L. Watson, *The Early Methodist Class Meeting: Its Origins and Significance*, Wipf & Stock Pub, 2002, p.173(note 51); Clifford W. Towson, *Moravian and Methodist*, pp. 184-195.

³¹ Howard A. Snyder, *The Radical Wesley & Pattern for Church Renew*, Illinois: Inter-
university Press, 1980, p.35.

³² Watson, David Lowes, *The Early Methodist Class Meeting: It's Origins and Significance*,
Wipf and Stock Publisher, 2002.

³³ *Ibid.*, p.74-80.

³⁴ Clifford W. Towson, *Moravian and Methodist*, p. 185.

³⁵ ウェスレーとピューリタンとの関係についての日本語研究は、馬淵彰「ウェス
レーとピューリタン」『ウェスレー・メソジスト研究』4 (教文館、2003) 61-81
頁を参照。ここで馬淵彰はセル(G.C.Cell)やデイヴィス(Horton Davies)、ニュー
トン(John A. Newton)、モンク(Robert Monk)などを中心としたウェスレーとピューリ
タンの関連についての研究史を三期に分けて分析し、その課題について比較的詳
しく述べている。

³⁶ 実は、この同じテーマによるモンクの著書は二つの版がある。先ず、初版は 1966
年出版されたもの (Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage*, Nashville: New

る。

まず、ウェスレーはその両親ともピューリタンの家庭の背景を持っていた。より詳しく言えば、ウェスレー父方の祖父と母方の祖父は、共に国教会を反対して教会の講壇から追放される程の仕打ちを受けたピューリタンの伝統に立つ聖職者であった³⁷。一方、ウェスレーの両親サムエルとスザンナは徹底的な非国教徒の家庭で生まれ成長したにもかかわらず若い時に父母たちの非国教会から離れイギリス国教会に再び帰属した人々であった³⁸。小さい頃のウェスレーはピューリタンの家庭背景の下に育てられた。その彼がピューリタンの気質を受けつぐようになった決定的な鍵となったのは、その母スザンナの影響によるものであった³⁹。

さて、モンクはこれまで論じたイギリス国教会とモラビア派の以外に、「ウェスレーの小グループ運動」に類似しているものを紹介している。それはピューリタンの「集められる教会」 (**gathered church**) と呼ばれるものなのである⁴⁰。デイヴィスも、ウェスレーの小グループ (**societies**) が言わばピューリタンの概念の「集められる教会」と、「全信徒祭司主義 (**the priesthood of all believers**)」の混合物 (**amalgam**) である、と主張している⁴¹。すなわち、メソジスト運動に

York, Abingdon Press, 1966) であり、再販 (Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage*, Lanham, Maryland, and London: The Scarecrow Press, 2nd edition, 1999.) は改訂版として 1966 年の初版から 33 年間他の研究者たちから指摘された多くの見解を反映している。それに関しては馬淵彰「ウェスレーとピューリタン」『ウェスレー・メソジスト研究』4、75 頁を参照。

³⁷ Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage*, pp.17-20(1966), 8-12(1999).

³⁸ *Ibid.*, p.21(1966), p.11-12(1999).

³⁹ John A. Newton, *Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism*, London: Epworth Press, 2nd 2002.

⁴⁰ Robert C. Monk, *op.cit.*(1999), p.182. 同じ本 1966 版にモンクはトールソン (Clifford W. Towson, *Moravian and Methodist: Relationship and Influence in the Eighteenth Century*) とシモン (John S. Simon, *John and the Methodist societies*, Epworth, 1923.) がウェスレーの小グループとピューリタンの集められる教会との関係についての観点が欠いていると言及している (cf. Robert C. Monk, *op.cit.*, p.211.). ところが、ワットソンはウェスレーの小グループに対するピューリタンの影響について言及している (Watson, David Lowes, *The Early Methodist Class Meeting*, p. 26-27.)

⁴¹ Horton Davies, "Epworth's Debt to Geneva-a Field of Research", *The*

あらわれる信徒の説教者をはじめメソジスト・ソサエティー、班会、組会など小グループで信徒のリーダーを用いることを導入したことと、そして自分だけでなく他人の霊的生活のため信徒の間に相互に責任を分かち合うことなどは、ピューリタンの概念であった。

モンクは、ウェスレーの小グループとピューリタンの「集められる教会」の類似性を次の幾つかに分けて説明している⁴²。第1は相互関心と交わり、第2に個人的な証し、第3は本質的な証拠あるいはキリスト者信仰の証しとして聖(holiness)の理解、第4は見解の自由についての強調、第5は契約の理解と会員たちの訓練、そして第6の最も大切なものとして「集められる(gathered)」性格を持つ集められる共同体(“gathered” communities)なのである。ピューリタンは大きな教会というグループの中で集められる小さな共同体として始まり、彼らが独自に集められるグループの意義を見出した後は、分離していく。ウェスレーはこの国教会を離れるまでは行かなかったものの国教会とは異なる他の人々が「集められる」グループというその本質については意識していた。馬淵彰がメソジストの小グループである「ソサエティーなどその組織形態や運営方法とピューリタンの間に類似性があるが、それらの起源をピューリタンだけ求めることはできない」⁴³、と語ったのはその通りである。というのは、これまで既述したようにウェスレーの小グループに限って言えば、少なくとも国教会やモラビア派、そしてピューリタンの影響が見出せるからである⁴⁴。モンクが主張しているように、「ウェスレーは自分の小グループ運動において、信徒の説教者をはじめとする多くのピューリタンの要素を取り入れることにより、その中でも「集められる教会」の伝統はメソジスト小グループの背景となっていた」、と言えるのである。

Livingstonian, 1960, p.6 ; Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (1999), pp.182-183 から再引用。

⁴² Robert C. Monk, *op.cit.*(1999), pp.183-196.

⁴³ 馬淵彰、『前掲書』、79頁。

⁴⁴ モンクはそれ以外にもカトリック、初代教父、ルター派などを挙げている(Robert C. Monk, *op.cit.*(1999), p.2)。

II. 実験(experiment)⁴⁵としての小グループ

ウェスレーはその生涯を通して「生きた信仰(living faith)」を追い求め模索したが、そのために彼はキリスト教を「実験的宗教(experiment)」という表現を用いた⁴⁶。ロバート・クッシュマンは、ウェスレーのこの「実験的あり、実践的なディヴィニティー」という用語を使って、メソジストの教理的な研究書を出している⁴⁷。ウェスレーがキリスト教を「実験的な宗教」と言った時、それは聖書と伝統、そして理性という国教会の三つの柱を最後の体験(experiece)において実験的に理解しながら検証するという意味なのである。野呂芳男は、ここでの「体験は個人主義的なものではなく、その背後に教会の交わりの体験」⁴⁸であると言っているが、それはまさにウェスレーの小グループにおける「交わりの体験であり、実験」なのである。

1781年ウェスレーは『メソジスト教徒と呼ばれた人々の略史(A Short History of the People Called Methodists)』の中で、メソジスト運動が生まれた起源となったものとして、ホーリークラブとサヴァンナのソサエティー、そしてフェター・レイン・ソサエティーの3つを挙げている⁴⁹。A.アムストロンがメソジストを「実験的宗教(experimental religion)」あるいは「体験的宗教(experiential

⁴⁵ ウェスレーが好んだこの単語は「実験」とも、また「経験」とも訳せるが、筆者は小グループにおける彼の実践的な側面と経験による検証的な面を考え、わざと「実験」と訳したい。

⁴⁶ “Experimental religion”, Wesley, John(by), Albert C. Outler (ed.), *The Works of John Wesley* (BE), vol. 1. Preface of Sermons, Nashville : Abingdon, 1984, p.106.

⁴⁷ Robert E. Cushman, *John Wesley's Experimental Divinity: Studies in Methodist Doctrinal Standards*, Nashville : Kingswood Books, 1989.

⁴⁸ 野呂芳男 『ウェスレーの生涯と神学』、日本基督教団出版局、1975年、224頁

⁴⁹ Wesley, John(by), Rupert E. Davies(ed.), *The Works of John Wesley* (BE, vol. 9; *The Methodist Societies History, Nature and Design*), Nashville : Abingdon, 1989. pp.430-431. これら三つの小グループは、先ず1729年11月4人のメンバーを中心にオックスフォード(Oxford)で起こった運動であり、次は、1736年北米のジョージア(Georgia)宣教時代にサヴァンナのウェスレーの家で20-30人が集まった小グループである。そして最後はウェスレーの回心後、1738年5月1日モラビア派の宣教師ペーラー(Peter Böhler)と共に作った小グループ運動である。

religion)」である、と表現しているように⁵⁰、ウェスレーはこれらの三つのソサエティーを小グループ運動の実験段階として体験し、実験しながら自分の独特な小グループ運動として展開していったとすることができる。

1. ホーリークラブ (Holy Club)

ウェスレーが1727年8月～11月まで約2年の間、ルート (Wroot) で父サムエルを助け司祭補として父の牧会を手伝った際、弟のチャールズは1729年モルガン (William Morgan) とゴア (Francis Gore) と共に大学で真剣な学びと信仰生活の向上のため小グループ運動をしていた⁵¹。その後の1729年11月(22日)、教授 (Fellow) としてオックスフォードに迎え入れられたウェスレーは、自然とこの小グループのリーダーとなっていった。このホーリークラブは、当時、国教会「宗教ソサエティー」の構造を手本にしている。特に、霊性訓練の面ではウェスレーの教育的な指導の面が発揮され、そのメンバーたちは真実な生活の実験を行い、それを試みた⁵²。このような霊的な実験と訓練のための小グループ「ホーリークラブ」は、ウェスレーがアメリカ・ジョージア宣教のためにイギリスを離れる1735年まで6年間続いた。

このホーリークラブを通してウェスレーが実験し学んだのは、個人の霊性訓練(祈り、聖書、断食など)を始め互いに分かち合う交わりの力、そして個人的な聖と社会的な活動のバランスなどである。これらの内容は後にウェスレーがメソジスト小グループの組織を作る基礎となるのである。

2. ジョージアのサヴァンナ・ソサエティー (Savannah Society)

ウェスレーが実験した第二の小グループ運動は、1735年から37年までアメリカ・ジョージア州サヴァンナで宣教師として働いた時に試みられた。彼はサ

ヴァンナの自宅で20～30人が集まる小グループを作り、定期的な祈りと讃美、聖書研究、信仰的な対話などを通して相互に信仰的な助け合う形式をとった。ジョージアでの小グループはオックスフォードのホーリークラブに倣ったものであったが、アメリカでそのような小グループ運動を行い、実験を試みる事ができたことで、さらに以前より成熟したグループを作り出す結果に結びついた。

このサヴァンナ・ソサエティーのホーリークラブとの相違点は、第1として、現地の教会信徒によって形成されたことである。すなわち、ホーリークラブが大学におけるエリート (Elite) たちによる自発的なグループであったとすれば、ジョージア州での小グループは教会の信徒なら誰でも加入できるものであった、ということである。これによりウェスレーは一般の人々、すなわち民衆と共にする体験を得た、ということができる。第2に、ジョージアの小グループにおけるウェスレーの特別な役割とは、ホーリークラブにおいて指導者であった彼がモラビア派による指導の手ほどきを受けたことである。そして、第3はモラビア派の方法を創造的に自分のグループの中で適用し実験した、ということである。ウェスレーは国教会の司祭でありながらモラビア派による「教会内の小さな教会」の原理を小グループの中で実験していったことになる。

3. フェター・レイン・ソサエティー (Fetter lane Society) : エキュメニカルな集い

ウェスレーの小グループ運動の最後の実験段階は、1738年5月1日ウェスレーがモラビア派の宣教師ベラー (Peter Böhler) と共にロンドンで創立した「フェター・レイン・ソサエティー」である。このグループは、国教会の宗教ソサエティーである「敬虔会」とモラビア派の「班会 (Band)」が結合された⁵³国教会の教理や規則を守ると同時に、モラビア派の班や愛餐会、相互告白などを取り入れたものであった。ウェスレーにとってこれは今までとは全く違う新しい試みのモデルであった。

それでは、このフェター・レイン・ソサエティーを通してウェスレーが実験

⁵³ Ibid, p.66.

⁵⁰ Anthony Armstrong, *The Church of England, the Methodists and Society 1700-1850*, University of London Press, 1973, p.49.

⁵¹ チャールズは1726年にオックスフォード大学に入学するが、まもなく自分の信仰生活を反省し、努めるが、様々な壁に当たり、それ故、兄ジョンに手紙を書き、助言を求めている (cf. 手紙、1728. 1.20 ; 1729. 5.5)。

⁵² Henderson D. Michael, *op.cit.*, p.43.

したものの特徴について論じていくことにする。第1に、ウェスレーが宣教を強調するようになったことである。この時期から彼の説教は「信仰義認による救い」が中心となり⁵⁴、グループによる宣教の強調はウェスレーの小グループ運動に具体的にあらわれるようになる。第2の特徴は、宗派的な背景や特徴などを問わない幅広い交わりである。言い換えると、この小グループは国教会の要素とウェスレーのメソジスト的な要素、モラビア派の要素が組み合わされた言わば、エキュメニカル的な集いであった。もう一つの特徴は、神学訓練を受けてない一般信徒 (*lay*) も小グループ運動に積極的に参加し用いられたことである。このことはその後、メソジスト運動が成長して行く上で根幹となっていく部分である。

Ⅲ. ウェスレーの小グループ運動におけるメソジストの霊性⁵⁵

これまではウェスレー小グループ運動の背景や実験としての小グループについて論じて来た。それでは、小グループ運動の霊性とは何かについて考察してみる必要がある。ウェスレーによるメソジストの霊性は外的な要素 (*outward*) と内的な要素 (*inward*) とに分かれる⁵⁶。内的霊性はキリスト者の完全思想によって強調される純粋な愛でキリストにおける神との親密な連合 (*inner union with God*) を意味し、外的霊性は他人のための愛 (隣人愛) を指すものである⁵⁷。この章では、先ずメソジスト霊性の道具 (*instrument*) としての「恵みの手段」について、次にウェスレーの霊性訓練の場としての小グループ、とりわけ班会と組会を中心に論じ、メソジスト霊性の核心であるキリスト者の完全について述べていくことにする。

1. 小グループによる組織的な霊性

⁵⁴ ウェスレーが回心以後、1738年6月に行った最初の標準説教は、信仰義認であった。これに関しては *BE, vol.1, sermon 1, pp.117-130* を参照。

⁵⁵ メソジスト霊性についての基本的な文献は、註2を参照。

⁵⁶ *Frank Whaling ed., John and Charles Wesley, p.13.*

⁵⁷ *Ibid., p.64.*

1739年4月、ウェスレーは野外説教を始めることになり、信徒の数が増えることにつれ小グループ (*society*) を通して彼らを養育訓練し、相互の交わり、相互責任を担うなどの体系的な小グループを組織することに至る。

ウェスレーの小グループは、メソジスト・ソサエティー (*Methodist Society*)、組会 (*Class Meeting*)、班会 (*Band*)、選抜ソサエティー (*Selected Society*)、懺悔会 (*Penitent Bands*) など、これらは互いに連なる関係 (*Connexion*) ⁵⁸のものであった。これらの小グループは互いに関係的な状況の中でそれぞれ違うレベルの霊的な指導 (*spiritual guidance*) を提供したとすることができる⁵⁹。

ここではウェスレーの代表的な小グループの組織である班会と組会⁶⁰を中心に考察して見ることにする。先ず、モラビア派から刺激され組織された「班会」はメソジスト会の核心的な組織であると言することができるが、年齢や性差、結婚の有無などを考慮し組まれた組織であった。この組織は、愛と聖、意図の純粋さの中で信仰的に成長することを願い献身しようとする人々の自発的な集いであった⁶¹。班会は5~10人ほどのメンバーから成り立ち、回心した者たちの霊的な前進のためのものであった⁶²。

次に、メソジスト小グループ運動の革命的な組織⁶³であった「組会」は、ブリストルでたまたま必要に応じて偶然に組織されたものであった。ところが、1742年にはロンドンにおいても始められ1745~46年にはメソジストの典型的なパターンとして全域に広がるようになったのである⁶⁴。この「組会」はメソ

⁵⁸ これに関しては、*Brian E. Back, Randy L. Maddox(ed.), Connexion and Kononia: Wesley's Legacy and the Ecumenical Ideal, Rethinking Wesley's Theology for Contemporary Methodism, Nashville: Abindon Press, 1998, pp.129-141* を参照。

⁵⁹ *Douglas S. Hardy, Spiritual Direction with a Wesleyan Ecclesiology, Wesleyan Theological Journal, v.41, no.1, Spring, 2006, p.156.*

⁶⁰ これに関する代表的な著作としては、*Watson, David Lowes* の *The Early Methodist Class Meeting: It's Origins and Significance* と *Henderson D. Michael, John Wesley's Class Meeting: A Model for Making Disciples* などがある。

⁶¹ *Henderson D. Michael, John Wesley's Class Meeting: A Model for Making Disciples, Francis Asbury Press, 1997, p.112.*

⁶² *Howard A. Snyder, op.cit., p. 60.*

⁶³ *Henderson D. Michael, op.cit., p.11.*

⁶⁴ *John S. Simon, John Wesley and the Methodist Societies, London: Epworth, 1923, p.312.*

ジスト会に属するすべてのメンバーなら誰でも所属することができるウェスレーたち独自のものであった。初期には単純な目的で始められたこの組会が次第にその構成員たちにより多様性を帯び貴重な経験を踏まえメソジスト特有な霊性的な組織として発展していったのであった。そういう意味において、「組会」は個人的でありながら同時に共同体的な敬虔や交わりを共に経験する説明責任と信徒リーダーの重要性を強調するすべてのメソジスト会員による組織的な「完全聖化への訓練」に至るための契機となった、とすることができる。

2. 小グループが独特に培われる霊性

A. 相互の説明責任としてのスピリチュアル・アカウントビリティ (spiritual Accountability)

「アカウントビリティ」(Accountability)とは、スチュワードシップ(stewardship)と共にそもそもキリスト教の用語である。最後の審判を英語で **Great Accountability** と呼ぶのと同じように、アカウントビリティとは神に委ねられたそれぞれのタラントをその管理者(執事)となった者が常にその主人の前で説明できる状態にしておくことがキリスト者に課せられたアカウントビリティなのである⁶⁵。ウェスレーがキリスト者として単純な霊的訓練からアカウントビリティ⁶⁶に目覚めた契機となったのは、**1725年**⁶⁷、ウェスレーが国

⁶⁵ 藤本満、「ウェスレーによる人間形成論」、『キリスト教と人間形成』：ウェスレー誕生 300 年記念、青山学院大学総合研究所 キリスト教文化研究センター編、2004 年、155 頁。

⁶⁶ これに関しては『前掲書』、156 頁以下の「ディシプリンからアカウントビリティへ」を参照。

⁶⁷ ところが、この時期に関してはウェスレー自身の表現さえ一貫性がない。例えば、ウェスレーは自分の回心日であった **1738年5月24日**の日記において、**1725年22歳**の時、トマス・ア・ケンピスの著書を読み、感動を受けたと記し **BE, vol.18 (Journal and diaries)**, p. 243., **Wesley, John, W Reginald Ward, Richard P. Heitzenrater eds., Nashville : Abingdon, 1988**, 後の著作『キリスト者の完全に関する平易な解説』では **1726年**に読んだと記述している (**Plain Account, p.5**)。

また、日記にはテイラーについての言及がないが、**Plain Account**ではテイラーの本をア・ケンピスより一年前に読んだと記している。この件に関して、私はウェスレーの若い時の状況を比較的に詳しく描いているラック (Rack) の見解、即ち **1725**

教会の司祭補 (deacon) になった **23 才**の時に読んだ、ドイツの神秘主義者トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて (**Imitatio Christi / Imitation of Christ**)』と主教ジェレミー・テイラーの『聖なる生と死の規則と実践 (**Rule and Exercises of Holy Living and Holy Dying**)』などの書物であり、これにより自分の全生涯を神に捧げることを決心したのである⁶⁸。これらの書物を通してウェスレーは自分の心と生活のすべてが神の前で説明責任を課せられた存在であることを悟り、その年の**4月5日**から日記を書く習慣を始めるようになり死ぬ一週間前までの**66年間**、日記を書き続けたのである。

このアカウントビリティをウェスレーの小グループ運動に適用したのは、**1729年**オックスフォード大学でその仲間たちとホーリークラブを結成した時であった。ウェスレーを中心としたホーリークラブのメンバーたちは互いに自分の問題を告白し合い、時には日記を交換し読み、互いの問題を指摘し合って励まし合い支え合った。このようなことをすることによって、自分がいかに神の恵みを受容せず神の御旨に即して生きているのかは神の御前だけでなく友達や仲間の前でも問われていることを悟るのである。小グループの中では互いを責任ある存在として見做し、互いの行動と生活を見守るようにすることで、自らの責任説明を神の御前とお互いの前で果たしていった。これがまさにメソジストのアカウントビリティである。ワトソンはメソジスト霊性の構造として、相互の説明責任 (**Mutual Accountability**) を持つ組会を始め、恵みの普遍性、完全に向かう道、恵みの手段、讃美などを挙げているが⁶⁹、ウェスレーはメソジスト運動が本格的となった **1739年4月**の野外説教以後からメソジストの小グループ(すなわちメソジスト・ソサエティー、組会、班会、選抜ソサエティーなど)で具体的な形を通して、互いに果たすべき霊的なアカウントビリティを展開していったのである。

年5月にはア・ケンピスの書物を、そして同年6月にはテイラーの書物を、さらにローの書物は **1730年末**に読んだという考えに従う (**Henry D. Rack, Reasonable enthusiast : John Wesley and the rise of Methodism, London: Epworth Press, 1989, p.73**)。

⁶⁸ **Works, vol.11, 1984, p.366**.

⁶⁹ **David Lowes Watson, Methodist Spirituality, pp.182-193**.

B. 開かれた透明性 (Opened Transparency)

ここで透明性あるいは開放性というのは、ウェスレーによる小グループ運動の大切な特徴として隠し事をしない、自分の足りなさ問題を指摘してもらい、批判してもらい、日記を見せ合う、手紙を公開する、年会の記事録まで開放して出版するなどといったことである。これらのことは既述したように、これらのことはホーリークラブの時からメンバー同士で互いに成なされていた。

特にこのようなすべての人々に福音を提供するためのウェスレーの開放性 (openness) は、彼特有なものの一つであり⁷⁰、ウェスレーの小グループと他のグループとの相違は、当時交わりを追求するすべての人々に対する開放性であった⁷¹。言い換えると、ウェスレーがモラビア派から大きな影響を受けたにもかかわらずそれを離れざるを得なかった理由も彼らが持つ閉鎖性がその原因であったのである。実際に、ウェスレーがフェター・レイン・ソサエティーから離れるようになったのは、モラビア派の静寂主義と、モルターを中心とする閉鎖的な接近方式であった⁷²。このような閉鎖的方法はウェスレーが目指した開放的な決定方式、言わばキリスト者の解放性と率直な口⁷³に反することであった。ウェスレーは閉鎖された信仰共同体の中で互いの霊的な状態を点検し合うモラビア式の班会は時代の状況に合わないと考えていたのである⁷⁴。

このようなウェスレーの解放性、あるいは透明性は、メソジスト賛美歌の序文 (1738年) によく示されている。ウェスレーはモラビア派や神秘主義がキリスト教をこの世から離れた孤独な宗教を生み出すことに対して、「キリスト教の福音には孤独の宗教観は見当たらない。キリストの福音は社会的でない宗教を知らないし、社会的に聖でない聖は知らない」⁷⁵と批判する。また、ウェスレ

ーが行った「主の山上の垂訓」(1748年)の説教でも「キリスト教が本質的に社会的な宗教であり、従ってそれを孤立した宗教に代えることはそれを破壊することに他ならない」⁷⁶、と隠れたものや秘密ではなく開かれた透明性、社会性を強調し主張したのである。まさに、このようなグループの性格が「組会」や「班会」などを通して具体的にあらわれたと言えるのである。

C. 牧会的なケア (Pastoral care)

メソジストは相手の魂について無関心であってはならない⁷⁷。ウェスレーはキリストの神秘体を構成しているメンバーは「自然に互いをケアする」ことを強調し⁷⁸、ウェスレー自身も馬に乗って野外説教に出かけた時も、あるいはソサエティーの中で聖書を教えた時も、小グループを通して互いの魂に責任を持ち、人々を放っておかないでケアをするという原則を持っていた。すなわち、一人が霊的に成長するためには一人で頑張るのではなく、互いにケアするという相互牧会的なケアを大切にしていたのである。

例えば、ウェスレーは数多くの手紙を通して牧会的なケアをし⁷⁹、同時に小グループを通して牧会的なケアを行っている。実際に、ウェスレーは組会や班会などの小グループを恵みの手段として用い、その中で互いをいさめ、互いに罪を告白し、その罪のために共に祈り合い、誘惑に打ち勝つために励まし合い、互いの霊性に対して責任を担い合い、互いに対して小さなキリストとなることを求めている⁸⁰。

研究家のブレヴィンスはウェスレーの実践的な霊性構造としての恵みの手段について語り⁸¹、ウェスレー自身はこの恵みの手段を神が定められた外的なし

⁷⁰ Hunsicker, David., *John Wesley: Father of Today's Small Group Concept?*, p.203.

⁷¹ Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage*, p.182.

⁷² Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodists*, p.108.

⁷³ これについては、ウェスレーの説教 49 番「悪口のいやし」(BE, vol.2, sermon.49, pp.251-262) とそれに関する藤本満の訳者ノート (ジョン・ウェスレー、勝間田充夫・河村従彦・藤本満訳『ジョン・ウェスレー説教 53』(下)、東京: イムマヌエル総合伝道団教学局、390-393 頁) を参照。

⁷⁴ Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodists*, p.108.

⁷⁵ Thomas Jackson, *The Works of John Wesley*, London, 1984, vol.14, p.321.

⁷⁶ BE, vol.1, p.533.

⁷⁷ これについては、藤本満「ウェスレーによる人間形成論」、167-169 頁 (たましいのケア) を参照。

⁷⁸ *Naturally care for each other*, BE.vol.2, p.262.

⁷⁹ 藤本満は「ウェスレーによる人間形成論」、168-169 頁にウェスレーの手紙による牧会的なケアについて具体的に挙げながら説明している。

⁸⁰ 藤本満、『ウェスレーの神学』、福音文書刊行会、1990、243 頁。

⁸¹ Dean G. Blevins, *Means of Grace: Toward a Wesleyan Praxis of Spiritual Formation*, *Wesleyan Theological Journal*, v.32, no.1, Spring, 1997, pp.69-83.

るし、御言葉、行為として理解している⁸²。ウェスレーは恵みの手段を制度化された (**Instituted**) 手段と状況による (**Prudential**) 手段とに分け、その中で制度化された手段に祈り (**Prayer**) と聖書探求 (**Searching the Scriptures**)、主の晩餐 (**The Lord's Supper**)、断食 (**Fasting**)、霊性訓練の集い (**Christian Conference**) などを挙げている⁸³。この中で、恵みの手段としての「霊性訓練の集い」は信徒の交わりや霊的な対話を通して互いの霊的な状態の世話をするものであった。「霊的な集いと対話」の中心はグループにおいて個々人の多様な必要次元に応じた交わりと共に互いの霊的な説明責任 (**Accountability**) を担うことである⁸⁴。それ以外にメソジスト霊性の道具 (**instrument**) として恵みの手段である組会、班会、徹夜祈祷会、愛餐会、契約更新礼拝などはキリスト者の完全に至るための手段として用いられた。そして、もちろんこれらの諸手段はウェスレーの牧会的なケアのため小グループを通してその中で行われるものであった。

3. メソジストにおける霊性の核心：キリスト者の完全

私たちがメソジスト運動の霊性を理解するためには、ウェスレーの聖霊論を考慮する必要がある⁸⁵。ウェスレーにとって、聖霊の働きは、個人的にも、グループ的にも「完全な変化 (**total transformation**)」を目的としていた。それは墮落した人間が心も生活も聖なるものとなる言わば、「内的な完全 (**inward perfection**)」と隣人愛に見られる外的な表現としてウェスレーが好んで用いていた「社会的な聖 (**social holiness**)」である⁸⁶。ウェスレーが聖化の過程として用いた「キリスト者の完全」は、論争の余地があるもののウェスレーにとって「完全」はジェレミー・テイラーやウィリアム・ローの思想から学び取った言わば、罪を憎み善行による愛として表現される絶対的な「意図の純粹さ」⁸⁷、

つまり神に向かう絶対的な献身を意味していたのである⁸⁸。

ウェスレーが理解した完全は神に向かう意図の純粹さであり、人間の努力の結果ではなく、神の賜物という「先行の恵み」として与えられたものである。すなわち、私たちの中に働く聖霊の働きなのである。ウェスレーはまさにこのようなキリスト者の完全思想を小グループの中で実践しようとしたのである。このような点から考えると、ウェスレーが目指したのは小グループ運動を通して真理に従って熱心に求めるすべての人々が到達する実践的な霊性 (**practical spirituality**) ⁸⁹であったとすることができる。

結び

これまで 18 世紀ウェスレーの小グループ運動におけるメソジストの霊性について考察して来たが、既述したようにウェスレーは当時、広がっていた多くの小グループ運動から深い影響を受けながらも、色々な実験の段階を経て、霊性形成のためウェスレー自身の独自の小グループ運動を展開していったことがわかる。

最後に、ウェスレーの小グループ運動におけるメソジスト霊性の特徴として次の3つを挙げることができる。

第1に、ウェスレーは小グループにおいてメソジスト霊性の道具としての恵みの手段を積極的に用い、小グループ運動の中でメソジストの霊性を形成して来たと言える。特に、その中には組会のリーダーや信徒説教者たちのリーダーシップが大きな役割を占めていた。第2に、ウェスレーは色々な「実験段階」を経て、メソジスト独特の小グループを作り出し、それを霊性の場として用いた、ということである。特に、小グループの組織として「組会」と「班会」は、この世において真のキリスト教、純潔な教会を追求する「教会内の小さな教会」として霊的な訓練、交わり、養育、霊的な説明責任を持って、具体的な霊性生活を實踐して行ったものである。第3に、ウェスレーは小グループにおいて独特に培われる霊性である相互の説明責任としてのスピリチュアル・アカウンタ

⁸² BE, vol.1, Sermon 16: The Means of Grace, p.381.

⁸³ Works, vol.8, p.322-323.

⁸⁴ Dean G. Blevins, Means of Grace, p.77.

⁸⁵ Robin Maas, Wesleyan Spirituality, op. cit., p.310.

⁸⁶ Ibid., p.311.

⁸⁷ Works, vol.11, pp.366-367.

⁸⁸ Robin Maas, Wesleyan Spirituality, op.cit., p.311-312.

⁸⁹ Ibid., p.312.

ビリティー、開かれた透明性、牧会的なケアなどを通してメソジストの霊性神学思想の核心とも言えるキリスト者の完全思想を小グループの中で試みている。そのような小グループ運動におけるウェスレーの霊性生活の終着点はキリスト者の完全であり、その核心は神を愛することと隣人を愛することであった。

以上、これまで考察してきた小グループによるメソジストの個人的でありながら社会的な性格を持つ霊性は、今日のような個人化して、互いに隔離された生活を営むようになった現代社会と教会とに一つの示唆を与えているのではないだろうか。

(在日大韓基督教会・大阪北部教会牧師)